

「日光における安全文化の継承の歴史」
～安全専一からリスクアセスメントまで～
試行見学会を実施しました。

平成 29 年 8 月 30 日（水）、栃木労働局から白兼労働局長、高村総務部長並びに佐藤労働基準部長を、日光労働基準監督署から大貫署長、日光労働基準協会から加藤会長並びに高橋専務が参加し、ここ日光で



1912 年（大正元年）に誕生した「安全専一」から最新の労働災害防止対策であるリスクアセスメント（以下「R A」）までの軌跡をたどる見学会（試行）を実施しました。

日光労働基準協会会長並びに日光地区 R A 等協議会会長会社である古河電気工業(株)日光事業所から事業概要、R A を含む安全衛生活動及び働き方改革の推進状況について説明した。

（写真左が栃木労働局並びに日光労働基準監督署）

同社工場内を視察後、「安全道場」を視察しました。



安全道場内での「体感」・「見える化」による安全衛生教育について説明。

重量物への認識・安全意識を向上させる工夫、過去の災害事例を再発防止のための教材とするなどの工夫が随所にみられました。





同社敷地内にある大正天皇行幸啓の記念館
史上初の民間会社への行幸啓でした。

当時、使用された家具



明治 32 年に建造された掛水倶楽部を見学しました。足尾銅山を含め足尾地区の多くの産業史跡を管理する古河機械金属(株)足尾事業所より、足尾銅山の歴史、足尾銅山が日本の産業界・工業界の黎明期に、技術革新により日本の近代化に寄与し、現在もその技術が脈々と受け継がれていること。

と受け継がれていること。

また、当時の古河鉱業足尾鉱業所所長小田川全之が提唱した「安全専一」、大正昭和初期の足尾地区の「安全週間」のパレード等を記録した貴重な動画資料等について説明がありました。

日本の産業技術、近代工業化、安全衛生活動の黎明期の史跡が当時のまま多く残されていました。



掛水倶楽部内

緑化が進む松木地区を視察しました。当時の国策として足尾銅山は、国内の約 40%の銅を生産、その結果、日本初の公害問題も発生しました。多くの市民団体と共同で同社は、松木地区の緑化に取り組んでおり、多くの緑が戻ってきました。



松木地区

本山製錬所跡地（現古河機械金属事務所敷地）を視察。製錬所は平成 19 年から解体し、現在は、ターンテーブル、回転炉、自熔炉跡、クレーンガータ跡、煙突などわずかばかりが残るだけ、しかし、そのわずかに残った史跡は雄弁に歴史を語っていました。

本山製錬所跡地

